【試し読み版】

3

[第 I 巻第 6 章]

6

短い章です。そしていかにもキリスト教めいた、敬虔な中身なので、圧倒されたジンプリチウスは気を失ってしまう

眠りを満喫する間もなく、どこからかこんな声が聞こえてきた。「おお、恩に報いることを知らぬ、われらのごとき人間に、おお、このような大いなる愛を！　ああ、ただひとつのわが心の支えよ！　わが望み、わが宝、わが神よ！　云々」といった言葉であったが、その時のわたしは言葉をきちんとなぞることも意味を理解することもできずにいた。

これらはまさに、この時のわたしのような状況に立たされたキリスト教徒を、適切に力づけ、慰めを与え、喜びで満たすことのできる言葉のはずであった。ところがである。おお、なんという無知と純朴さよ。それらの言葉はどれをとっても、わたしにはちんぷんかんぷん、まったく理解できない言語で語られていて、しかも単にひと言もわからな

いというだけでなく、その珍妙さにびっくり呆れかえっている、という始末であった。ともあれ、この言葉をしゃべっている人はどうやら、空腹と喉の渇きとがもはや癒やされるべき時にある、と話しているように思われたから、[1]ちょうどわたしも同じく我慢できない腹ペコ状態だったし、自分を食事のゲストに加えてもらおうと考えた。そこで勇を振いおこし、木の洞の外に出てみたわたしは、聞こえてくる声のほうへ近づいていくと、そこに大柄な一人の男を見た。

ところどころに白い霜の降りた長髪が、ひどく絡みあったまま、肩の下まで垂れ下がっている。伸びほうだいの口ひげは、ほとんど巨大なスイスチーズのように顔を縁どり、

蒼白く黄味がかった顔は、たしかに痩せこけてはいるが、しかしどこか親しみのわく趣きだった。丈の長い上着は、いろいろな布の切れ端を使って千か所を超える継ぎはぎ、重ね布がしてあり、首と胴体には聖グリエルモ[2]が身につけたような重い鉄の鎖が巻きつけてある[3]。こんな容貌の男を間近に見ることになったわたしは、あまりにも薄気味が悪く、ぞっとしてしまい、まるで雨にびしょ濡れになった犬のように震えだしてしまった。しかし恐怖をもっと大きくしたのは、この男が長さおよそ六フィートはあると思われる巨大な十字架を胸に押しあてていたことである。今まで出会ったこともない、こんな白髪の老人にたいして、これはきっと〈トトさま〉が少し前に話していた〈狼〉という

lib:1.Cap:6
Der wahn
betrügt
Der Thor sucht Trost in Eitelkeit.
Der Klüg in Gott die Himlische freud.

ものにちがいない、とわたしは判断するしかなかった。とほうもない恐怖のなかで、わたしは即座にバグパイプを取り出した。自分のただ一つの宝物として、騎兵たちに奪われることなく一緒に持ち出してきていたのである。わたしはバグパイプを吹き鳴らし、調べを奏で、巨大な音をたてることで、この恐るべき狼を追いはらおうとした。

まったく人気のない森のなかで、出しぬけに耳慣れない音楽を聞かされた男、つまり隠者であるこの男は、始めこそ少なからずたじろいでいたものの、すぐにはっきりとこう判断をくだした。いま自分の目の前に現われたのは悪魔の幻なのだ、そしてこれは例えば、かつて偉大なる聖アントニウス[4]のもとに出現した悪魔のように、自分を苛み、敬

虔なるわが心を打ち砕こうとしているのであると。やがて隠者は気力を取り戻し、わたしを詰って、木の洞のなかの誘惑者めが、どうしてくれよう！　と言った。わたしはいつしかまた、木の内部へと撤退していたのである。隠者は、まことに堂々と落ち着きはらっていた。確固とした足どりでわたしのほうへ近づくと、わたしを〈人類の敵手〉[5]と呼んで存分に嘲笑した。隠者は言った。ほうほう、おぬしはあの一味の仲間であるな？　主なる神の摂理に従わず、多くの聖者たちを惑わしたるあの一味の[6]――。ここから先に何がどう言われたのか、わたしはもう聞くことができなかった。隠者が歩み寄ってきたことがあまりにも恐ろしくて、震えあがったわたしの意識は、もはやそこではたらくこと

をやめてしまったのである。わたしは気を失い、その場に倒れた。

［訳註］

（1）　キリスト教の文脈で用いられる飢えと食の表現は、いわゆる〈神の食べもの〉、すなわち人を癒やす神の言葉についてしばしば用いられる、讃美歌などに典型的なもの。詩篇 107, 4–9 を参照。

（2）　イタリア、シエナ近郊の谷マラヴァレで隠修生活をおくった聖者。一一五七年没。十六・十七世紀の多くの聖人伝に登場して肖像が描かれた。なお原文ではドイツ語式に「聖ヴィルヘルムス」（S. Willelmus）と記され、すぐ後に言及される「狼」（Wolf）と一種の頭韻をふんでいる。研究者 Berns によれば、これもまたキリスト教に精通した語り手と、この時点の単純素朴で無知な少年との視点の二重性を演出するものである。

（3） このあたりの隠者の容貌は全体として、聖オヌフリウスを想起させるという指摘がある。聖オヌフリウスはエジプトの隠修士で四〇〇年頃没。当時の信心書にしばしば取り上げられ、一般信徒にもなじみがあった。本書Ⅵ－26章で再び重要な言及がある。

（4） キリスト教における修道生活の始祖とも呼ばれる。荒野で悪魔の誘惑をうける場面が特に有名。エジプトにて三五六年没。Ⅱ－8章、Ⅱ－10章、Ⅵ－23章にも言及あり。

（5） マタイ24,24; 黙示録3,10を参照。悪魔の惑わしに抗う隠者の姿。

（6） 悪魔の常套的な言い換え。

pag. 25.
Schaü was die Zage Fürcht
nicht thüt
Die in uns blöden Menschen
rüht,
Wie könnt üns offt das
Creütz so güt!

［著者紹介］

ハンス・ヤーコプ・クリストッフェル・フォン・グリンメルスハウゼン

Hans Jacob Christoffel von Grimmelshausen（1622頃–1676）

ドイツ・バロック文学を代表する小説家・著述家・暦作者。ドイツ中西部ヘッセン地方の古都ゲルンハウゼンに生まれ、パン職人だった祖父のもとで育つ。三十年戦争に従軍して各地を転戦したあと、ドイツ南西部の上部ライン地方に居を定め、貴族の所領における執事、酒場の主人、町の代官としての職務をこなす生活のなかで、晩年の十年足らずのあいだに数多くの著作を執筆する。支配階層と民衆層の中間領域を生活圏として社会の緊張関係をつぶさに観察しながら、近世ヨーロッパに成立するピカロ（悪漢）小説と阿呆文学の傑作群を残したが、変名のもとに書かれた代表作『ジンプリチシムス』の著者であることが世に明らかとなったのは、ようやく19世紀中葉のことだった。当代の大ベストセラーはやがて「ジンプリチシムスもの」と呼ばれる類似作品のブームを没後においても発生させる。時代の硬軟さまざまな言説に取材しつつ、それと戯れるように形成された生気あふれる言語表現は、後のグリム兄弟によるドイツ学の営みにとっても貴重な資料となった。

［訳者紹介］

吉田　孝夫（よしだ・たかお）

1968年鳥取県生まれ。
奈良女子大学文学部教授。
京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了（ドイツ語学ドイツ文学専修）。博士（文学）。
著書に、『山と妖怪　ドイツ山岳伝説考』（八坂書房）、『語りべのドイツ児童文学　O・プロイスラーを読む』（かもがわ出版）、訳書に、プロイスラー『わたしの山の精霊ものがたり』、『かかしのトーマス』、『ニット帽の天使』（さ・え・ら書房）、ラーニシュ『図説 北欧神話の世界』、ホイスラー『図説 ゲルマン英雄伝説』、ザルトーリ『鐘の本』、グリム兄弟『ドイツ伝説集』（八坂書房）などがある。

ジンプリチシムス――原典訳『阿呆物語』
【試し読み版】その3

グリンメルスハウゼン作
吉田孝夫訳

二〇二六年三月二十五日　発行

発行所　（株）八坂書房
千代田区神田猿楽町一―四―十一
©2026 YOSHIDA TAKAO　無断複製・転載を禁ず

本ファイルは試読用に判型を変え再編集したものです。
総目次、ならびにその他詳細はこちらをご覧ください。
http://www.yasakashobo.co.jp/books/detail.php?recordID=787